

子どもたちの学びに対する姿勢を整える

—学校放送番組を活用して「学びの基礎力」を育みましょう—

1. 今、小学校第1学年の教室で

子どもたちに、学ぶ楽しさや喜びを味わってほしい——多くの教師たちは、そう願い、彼らに接しています。教室で、彼らの輝くような笑顔を見たい——彼らは、そのために教材や指導法や発問等を工夫して、子どもたちを導こうと腐心しています。

しかし、残念ながら、教師たちのそうした思いは、必ずしも満たされていません。特に、小学校第1学年を担任することになった教師たちの一部は、上述したような学習指導上の工夫を活かすことなく、別な問題への対応に追われています。それは、例えば、集中力がない、教師や友だちの話をきちんと聞けない、相手を傷つける言葉を平気で用いる、忘れ物が多いといった現象です。マスコミ等でも話題に上ることが増えた、「小1プロブレム」と呼ばれる状況です。

このような問題状況に、どうして陥るのでしょうか。小学校のシステムに対する不適応（幼稚園や保育所のそれとのギャップ）、家庭や地域の教育力の低下、教師の指導技術の不足などを指摘する向きもありますが、その他のものも含めて、おそらくは、それらが複合されて生じている現象であると理解すべきでしょう。

2. 「学びの基礎力」と学力向上

私たちは、数年前に、教科学力と、子どもたちの学びに対する姿勢や生活習慣等の関係について、いくつかの調査を実施しました。その際に、後者を、4つの柱から成る「学びの基礎力」という概念に整理しました。

4つの柱とは、豊かな基礎体験、学びに向かう力、自ら学ぶ力、そして学びを律する力です。例えば、豊かな基礎体験は、「直接体験」「メディア体験」「他者との支え合い（人間関係）」「基本的な生活習慣」に分類されます。また、学びに向かう力には、「感じ取る力」「学習動機」「自己効力感」「自己責任」が、自ら学ぶ力には「学習スキル」「学習定着の方略」「学習計画力」「自宅学習習慣」が位置づきます。さらには、学びを律する力は、「学習継続力」「学習のけじめ」「学習環境整備」「授業への構え」で構成されます。

何千名という小中学生を対象として、国語・算数（数学）の学力テストと学びの基礎力に関するアンケート調査を実施してみると、予想どおり、両者の間には、強いつながりがあることが確認されました。⁽¹⁾⁽²⁾ 今日、子どもたちの学力向上を図ることが社会的要請となっていますが、それには、学びの基礎力の育成が欠かせないのです。

3. 学びの基礎力を育成するための工夫

もちろん、私たちが「学びの基礎力」の育成と呼んでいる営みは、旧来から、生活指導や学び方指導といった名称で営まれてきたものの延長線上にあります。それらを拡張させ

た概念であると言った方が正しいかもしれません。学びの基礎力を充実させるための指導で大切にしたいポイントは、まずは、そうした過去の実践で培われた知恵を継承することでしょう。(3)

例えば、子どもたちに生活・学習上のルールを遵守させようとするれば、教師たちには、揺るぎない態度が求められます。ある子どもの行動を叱責するのに、別の子どもの場合は問題視しないといった状態であれば、子どもたちには、そうしたルールは浸透しないでしょう。加えて、ルールの徹底は、1人の教師が子どもたちを導ける期間には限りがあるので、学校全体での組織的取り組み、すなわち教師間の連携を欠いては、実現しません。

また、家庭学習の習慣を確立したいと考えている教師たちは、定期的に宿題を出し、それを、保護者の協力を得ながら、ていねいに点検しています。さらには、いくつかの学校では、家庭学習の時間や方法について、手引きを作成し、子どもや保護者に配布して、その重要性や具体的な取り組み方を示唆しています。

さらに、相手を傷つけない話し方を用いるといったコミュニケーションの態度やスキルについては、教師たちは、子どもたち自身に、クラスの話し合いの中で、その指標を定めさせたり、それを具体的に示した掲示物を作成させたりしています。子どもの自治の力で設けられたルールの確かさ、その影響の大きさを、多くの教師たちは経験的に学んでいるからです。

4. 学校放送番組『できた できた できた』への期待

しかし、それでもなお、残念ながら、騒がしい教室、学ぼうとしない子どもは少なくありません。上述したような教師たちの努力に、何が加わればよいのでしょうか。その1つが、「学びのモデル」であり、それを体現した映像資料です。

子どもたちは皆、学びたいという気持ちを有しています。しかし、それをどのように行動に移せばよいのかが分からないのです。つまり、学びの基礎力に関する教師たちの指示や説明は理解できているのだけれども、具体的なイメージが湧かないので、実行に結実しないという状況です。少子化等の状況により、彼らのまわりには、学びの基礎力を有した、よきモデル＝年長の子どもの見あたらないのですから、無理もありません。

NHK 学校放送番組『できた できた できた』は、子どもたちに、そうした「学びのモデル」を提供してくれるに違いありません。年間 20 本の番組のテーマには、学びの基礎力の重要な要素が数多く盛り込まれています。そして、なにより、整理整頓、あいさつ、食事、読書等々の取り組み方を具体的な映像でモデル化してくれます。それも、視聴する子どもたちと同じ世代の子どもの姿という、等身大のモデルが提供されるわけです。

何度言っても分かってもらえない、「分かりました」と言ってくれるけれども、〇〇さんには行動が伴わない——そんな気持ちになったら、学級活動の時間や朝学習の時間に、子どもたちに、この番組を視聴させるとよいでしょう。きっと、子どもたちの「動き」が変わってくるに違いありません。

もちろん、問題が生じる前に、「予防薬」として、番組視聴を導入することも一考に値します。学級開きの際やゴールデンウィーク・夏休み前が、その典型場面でしょうか。さらに、いくつかの回の内容は、国語科や生活科の学習活動のモデル提示のためにも利用で

きるでしょう。

子どもたちの学びに対する姿勢を整えたい先生方にとって、『できた できた できた』は、そのアプローチを増やすためのよきパートナーになるに違いありません。

注

(1) 田中博之・木原俊行監修『豊かな学力の確かな育成に向けて』ベネッセ教育総研，2003年

(2) 田中博之・木原俊行・大野裕己監修『総合教育力の向上が子どもの学力を伸ばす』ベネッセ教育総研，2005年

(3) NHK 学校教育番組部が2007年度等に作成・配布したパンフレット『教育テレビ&ICT活用で授業力アップ』の中に、学びの基礎力を含む、教師の授業力に関するチェックリストが収められています。ぜひ参照してください。